いのちに代えて

警察庁長官銃撃事件後一カ月の節目のつもりか、長官の回復状況は「驚異的」と記者発表。警備警官四人が現場にいての白日下の事件、今なお皆目不明のまま。「全員射殺されなくてよかった」。警察関係者の間ではこんな信じられない会話がかわされているという（週刊新潮四月十三日号）。初めから身を挺しない警備こそ私たちにはまさに「驚異的」なのだ。全員丸腰。犯人はそれを見すかしていたかも。

福祉の第一眼目は安全保護。徘徊者がいてもカギ閉じ込め、縛りつけなどで拘禁の違法行為をしない特別養護老人ホームでは、日夜そのための必死の努力がなされている。

本年一月ある寒夜、わが任運荘で痴呆症老人が居なくなった。夜勤寮母二人に加え緊急招集された寮母たちの全力捜索でもついに見つからない。ここは急坂道とガードレールもない深い長い水路がとりまく最も危険な地域。もはや消防団依頼しかない。しかし、どたん場、昨日入所時の家族の言葉「夜食のくせあり」が寮母主任にひらめ

く。そうだ、残るは隣接病院内のあの売店だ。そこにうずくまっていた。

ようやく皆が寮母室に引き揚げ、夜勤の古庄寮母がつぶやく。「もしものことがあれば、私は生きてはおれない」。しばらくして「私もそうするだろう」。もう一人も「わたしも」。

思わず寮母主任は叫んだ。「ダメよ、ダメよ、そんなこと絶対してはダメ…」。皆の目が濡(ぬ)れている。夜は白みかけた。たまたま泊まっていた私が見た沈痛粛然(ちんつうしゅくぜん)たる現場である。

（一九九五年五月三十日）